

令和2年1月1日発行 巻数/第75巻第1号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月23日第3種郵便物認可

# 春燈

1 月号

2020 January



主宰の句

安立公彦

冬桜仰ぐひとなく咲きぬたり

蕉風の余情や今に桃青忌

独り酌む近江の酒や桃青忌

冬蝶の色うすれゆく雨の中

帰り花忘るるといふ幸のあり



# 成瀬櫻桃子の句

## イエス抱き跣足のマリア走りけり

成瀬櫻桃子句集（ふらんす堂）の扉に先生に書いて頂いた一句です。聖母マリアは、像も絵画も常に悲しみに耐へ、祈る姿を表しています。蒼い衣から垣間見える爪先は常に素足です。この句の「跣足のマリア」の中七に強く惹かれました。私が学んだカトリック系の学校の尼僧の校長先生は、冬でも素足にサンダルでおられたからです。

松山三千江

成瀬櫻桃子の句

一月や一といふ字のよどみなし

「春燈」昭和五十七年

令和という時代を迎え、夏の東京オリンピックも控え新しい一年の幕明けが始まる今、この一という身近にあり、簡単でありながら大きな意味をもつ一文字には、希望があふれ、新年の句に相応しく心ひかれる。句に読まれている「よどみなし」の言葉には、しみじみと重い意味が含まれているのを感じ、淡々と詠まれたこの句には感慨深いものがある。

豊谷ゆき江

# 燈下集



○ 佐藤信子

ときをりは雲の影さす花野かな

亡き母へ買ふ銘香や初紅葉

二上山を覆ふ雨雲葛嵐

娘には無口な父や温め酒

菊の香や慶事に晴るる二重橋

○ 山内四郎

向日葵の息途絶えしか項垂れ

秋晴や空の半分海の上

秋晴や家並を見する息吹島

秋晴や我を見下ろす二ツ岳

腕組みし目に秋空のありにけり

○ 園部露郷

灯火親し眠れぬ夜の一人囲碁

誰ならん今朝の戸口に早松茸

家中を松茸飯の香が占むる

可惜夜や名月座敷にゐて観ゆる（無毛）

座敷より名月を観て一壺天

○ 西川保子

卓上に灯点すごとき熟柿かな

七部集に挟む葉や火の恋し

ビル風の身に沁む蕉翁終焉地（大阪・御堂筋）

鴉日和旧家の蔵のがらんどろ

残り時間計るすべなし栗を剥く

○ 松橋利雄

冷ましやのこぎり屋根の窓明り 桐市句

露けさの灯点しころや機の町

先のことよりまづは秋括るべし

秋しぐれ気丈の母を語りけり

灯火親し蘊蓄を聴きながしけり

○ 橘 正義

童心にかへり落柿蹴りにけり

落葉踏んでその音に耳傾くる

靴の裏たしかに木の实踏んでゐたり

立止まる首傾げたる鴉見つけ

大輪の白百合返り咲きにけり

○ 小林のり人

赤蜻蛉ニアミスのなく流れをり

字にのこる無常休みや豊の秋 金逆く

胡桃割る鳥の知恵の車道かな

廃校や櫓田の先小木岬

紅葉且つ散るや弓なり只見線

○ 三上程子

蓑虫ぶらり根つからの遊び好き

兩岸の暮しをつなぐ橋や秋

雁や届かぬ声と思へども

残る虫語彙の少なくなりけり

捨石に日の当たりたる文化の日

○ 中野あぐり

少年の秋思空き缶蹴りてゆく

配られて小さき影置く零余子かな

蓮根掘り両手に夕日したたらす

落日を吸ひあましたる熟柿食ぶ

豆を煮るびつくり水や年詰まる

○ 諸戸せつ子

秋暑し玄関の鍵かけ忘れ

大字書くは終りと決めし硯洗ふ

零余子飯険しくなりぬ九十路

運動会口一文字にバトンの子

決断を迷うてばかり芒散る

○ 大嶋 洋子

小鳥来る庭についばむ物ありて  
冬桜林道登る子につきて  
子の腕にすがりて仰ぐ冬桜  
冬夕焼境内親子ふたりきり  
境内にもう誰も来ず冬桜

○ 綱 徳 女

揚花火終はりて残る星一つ  
紅葉紅し目交ぜでこころ通じけり  
他人事のやうに死語る月の夜  
とどのつまりは己を愛す夜長かな  
西の市裏通りゆく二人かな

○ 中村嵐楓子

ジャコメツティばりの精霊ばつたかな  
桃載せてみて手の老いを哀しめり  
雑草に風むごく吹く秋彼岸  
菊膾味覚のみまだ衰へず  
坂下りるとき笑ふ膝冬隣

○ 鷹崎由未子

桐生けふ空の蒼さや小鳥来る（桐生五句）  
人柄も麵も幅広豊の秋  
爽やかやレンガ造りのペーカリー  
来年の曆織る音秋高し  
藍の華色なき風をそめにけり

○ 小張 昭 一

祖母の戒名ひらがな二つ菊日和  
神に祈る御手洗の水冬に入る  
平成両陛下しかと令和へ大嘗祭  
雨来るらし風聴いてゐる炬燵かな  
爛熱く古漬茄子に母想ふ

○ 鈴木 鳳 来

日和よき寺領の森や鶺鴒の群  
毒茸を濡らす山雨や獣径  
残る虫闇の深さを鳴きにけり  
大野分とつぷり暮るる杣の谷  
ぼんぼこと木魚の弾む菊日和

# 余言

安立公彦

菊の香や慶事に晴るる二重橋

佐藤 信子

元号が平成から令和に変わったのは五月一日。その新天皇が即位を宣言する「即位礼正殿の儀」が十月二十二日に、皇居・宮殿の正殿・松の間で行われた。この「即位礼正殿の儀」は、一連の皇位継承儀式のうち最も重要な儀式の一つとされている。但し午後の祝賀パレードは、台風による被害に配慮して、十一月十日に延期された。この即位パレードには、十二万九千人の人々が沿道を埋めた。

この句を見ていると、一連の慶事が鮮烈に思い出されてくる。この菊は、菊花御紋章として用いられている。「慶事に晴るる二重橋」は、新皇后の涙を拭く景に彩られた。

字にのこる無常休みや豊の秋

小林のり人

この「字」は「あざ」。町村内め区画の名。大字小字がある。「無常休み」は、越後地方で葬式のある日、村内一般が休業する事を謂う。この句を見て、今でもそういう慣

例があるのかと思うと、地方色の豊かさを感じる。「無常休み」など辞書を引いて知った。静まり返った一村の、稲穂の豊かさが、「無常休み」と善く釣り合っている。

蓮根掘り両手に夕日したたらす

中野あぐり

蓮根を掘り上げるのは、蓮田の水を落としてからが普通とされているが、その水が浅くて残っている所もある。この句はそういう背景に拠る。「両手に夕日したたらす」がみごとだ。その両手は掘り上げた蓮根を持ち、泥まみれの蓮根から泥水が滴る。折からの夕日が滴る泥水をつつみ、それを、「夕日したたらす」と表現する。「両手」が善い。作者は体調を崩したと聞いたが、この句を見る限り、心身ともにご健在のようで喜ばしい。

人柄も麵も幅広豊の秋

鷹崎由未子

色鳥やこの機町の灯は消えず

尾野奈津子

使はれぬ湯屋の煙突秋の雲

大文字孝一

三句ともに春燈勉強会での「桐生」への挨拶句。第一句の「麵」は、中広の紐革鱧鮓。昼食に入った店の和室で食した。当地の名品とのことで、食べ応えのある麵だった。所変われば食も変わる。「人柄」はこの地の片桐てい女さ



んを指す。「幅広」が何とも好ましい。「豊の秋」の座五が、「人柄」、「麵」ともに善く支えている。

第二句。桐生は「桐生織物」のまちとして、「西の西陣、東の桐生」と謳われ千三百年の歴史を持つている。また、平成二十七年に認定された「日本遺産」の一つでもある。鋸屋根の織物参考館「紫（ゆかの）」、織物記念館など、桐生の「織物の灯」は、まさしく消えず、この後も伝統を伝えてゆくことだろう。「色鳥」が如何にも機町にふさわしい。

第三句。桐生のまちには、「桐生新町重要伝統的建造物群保存地区」がある。この「湯屋」はその区域の一つである。「使はれぬ湯屋の煙突」が、その実形を普く写している。街包みの歴史と生活の姿が浮かんで来るような句だ。

雨来るらし風聴いてゐる炬燵かな 小張 昭一

この「炬燵」は師走にふさわしい。歳末の雑用を片付けて、ふと窓外を見ると、外はいつしか雨になっている。出している炬燵に拠る作者。「風聴いてゐる」に、寸暇を愉しむ有り様が善く出ている。「雨来るらし」にも、移りゆく季節の兆しを感じられる。

安住先生の『俳句への招待』に、「花鳥とともに作者が居風景のうしろに作者がいなければつまらない」の一節がある。この句を見ながら、そういうことを思っていた。

「幸せですか」芒に声をかけらるる 久米 憲子

こういう思いは、多くの人に潜在意識として存在する。芒野を歩いている作者。人の背丈を越す芒の群落到隠れる村里。夕暮近い空には、茜を帯びた千切れ雲が浮かんでいる。ふと心の奥底から、声ともならぬ声の湧く思いがする。「幸せですか」、我が身の心に問われる声の無い言葉。一瞬歩みは止まる。「幸せですか」、わが身に声をかける作者。雲は一際茜を濃くして、空の彼方に消えてゆく。「幸せです」。作者は頷くように茜の空を見つつ独語するのだ。折からの風を得て、芒は穂先に夕日を集める。

秋簾傾げるままに古本屋 木村 梨花

最近街を歩いていても、古本屋を見ることが全くと言って好い程少なくなつた。書籍離れがその一因だろう。店を閉じる古本屋、しかし「古本屋」は馴染のある言葉だ。神田神保町の古本屋には良く行ったものだ。

この句、秋に入つても簾を外さない古本屋。それは単なる仕舞忘れではなからう。「傾げるままに古本屋」が、その仔細を善く言い得ている。こども人の入りが悪くなったのだ。傾げる「秋簾」に哀れを感じ勘。この一句の「うしろ」には、作者の存在を確と感じる。

春燈賞（抄）25句自選

近藤真啓



畢生の一番勝負独楽回す  
靴底に土の弾力雨水かな  
風光るへうたん池に鯉の髭  
草餅やずしりと重き小銭入  
交々の道へ影引き卒業子  
花冷えや研究室の時計磨く  
木洩れ日に輝くティアラ五月来る  
エジソンを越ゆる発想夏つばめ

雨の日の噴水高くあがりけり  
金糸梅雨さへ心地良き一日  
ここよりは未踏の世界夕蜩  
風鈴に山河の記憶ひとつ鳴る  
夕虹を人待つひとと眺めをり  
片木盛りの蕎麦のさざ波冷し酒  
一言を胸に留め置き遠花火  
白桃に委ぬる時の流れかな  
小鳥来や句集の赤き栞紐  
鉄棒に一日の余熱秋夕焼  
ふはと立つ藁のかをりやあかどんぼ  
定まらぬ結語を如何にラ・フランス  
小春日や海岸沿ひの膝栗毛  
うつそみの恋は盲目冬薔薇  
二人抜け四人加はる焚火かな  
卓囲むひとりひとり手に蜜柑  
煩惱の音の幾重や年果つる

# 当月集

安立 公彦選



○ 近藤真啓

叡山は日暮を急ぐ初紅葉

束の間を秋風纏ひ独歩かな

木の実落つころの隅につと触れて

礼状に臘の封印文化の日

開き癖つきたる医書や夜半の秋

○ 山下健治

山頂の神苑寂と鵬日和（白石神社三句）

水澄むや古池守護の石蛙

野に在す如意輪観音秋の声

駅頭の花壇くれなゐ葉鶏頭

秋深き午後の散策白秋忌

○ 池上昌子

公園の朝の散歩や小鳥来る

草叢に一際白き男郎花

飛行機雲の一直線や大花野

新蕎麦や水車ゆつくり回りゐる

沼沢の干上がる秋の暑さかな

○ 小林紫乃

花野ゆく白髪交りの同級生

秋日濃き木洩れ日の道修験僧

鱒雲缶蹴り遊びの子等の声

月天心赤子を抱く爺の背

歳月や渡良瀬川の秋惜しむ

○ 山下朝香

萩の花こぼして誘ふ寺の坂

灯火親し鼻に眼鏡の跡のこり

残さうかさて捨てやうか夜の長し

思ひ出を支へとしたりぬくめ酒

金風や出入自在の貴人口

# 春燈の句

安立 公彦選

灯火親し使ひ古りたる国詔辞書

群馬 舟田 房江

風立つや手櫛で直す木の葉髪

パノラマの上毛三山秋気澄む

秋深し圧力鍋で煮る豆や

つれづれを娘と杯かはす秋愉し

東京 山本 泰人

小股切れ上がるジーンズ星月夜

秋の蚊や吾の赤き血を盗み去り

伊勢神宮即位の秋日厳かや

深秋やワインの樽のチヨーク文字

福井 西本 花音

足止むる手帳コーナー冬隣

初紅葉流るる水に影落とし

ふるさとの夕日散らせる尾花かな

握手して微笑むばかり敦の忌

群馬 小菅 澄重

桐一葉はらりと夫の肩なづる



新松子野点で交はず花言葉

徒然の色無き風や友語る

山上のロツジ色なき風の中

山影の伸ぶる刈田の匂ひけり

そよぐ葉に翅を休むる秋の蝶

蘆の穂や杭の一羽の動くなし

たかだかと上ぐる即位や菊薫る

晴れやかにリチウム開発曼珠沙華 (吉野氏ノールベリ)

華やかに活躍目立つ秋日和 (女子ゴルフ譚)

晩菊や学徒出陣七十余年

国立劇場へむかふ濠端新松子

秋深し役者幟は風のまま

京外れの案山子やさすが着道楽

懐古園牧水歌碑へ紅葉散る

島根 土江 比露

東京 鈴木としお

神奈川県 犬嶋テル子